一人で行動していた学生が友を求めるまで

発達障害が疑われるＡ君の変化を通して

山崎　徳子
（常磐会学園大学）

問題と目的

2011 年の日本学生支援機構の調査により，診断書はないが発達障碍があることが推察され，実際に教育上の配慮を行っている学生の方が，診断がついていて支援されている学生よりも多いことが明らかになった。近年，大学の場でも人と関係を結びにくい学生が散見される。学生相談においてもこのような学生をどのように支援していくかが重要な課題であることは広く認知されるところとなったが，一人ひとりの多様性にどのようにアプローチしていけばよいのか，手探りの状態が続いている。入学以来一人で行動していたＡ君は，私の担当した授業を契機に，それまで考えることを避けていた自分の生きづらさに目を向け始め，友を求めた。その心情の変化をエピソードと語りから考察し，支援の一端を示す。

方法と研究協力者

本稿の方法論は「関与・観察とエピソード記述」によった。人の体験の内面的な部分を含めて記述するためには研究者自身が身体をたずさえ，その人に向き合わなければならない。人を理解することはまさにその人に即してでなければならず，この方法とその人を大切にすることは方法的態度として繋がっている。

研究協力者：　A 君　大学 3 回生。入学時より，書字の困難，考えのまとまりにくさなどを訴え，学習面で配慮の必要がある学生として学内で共通理解されていた。私の担当授業で発達に関連して自分のことを話すようになった。また，グループワークなどを通して顔見知りが増えていった。サークルや学内のボランティアに参加するようになってから，本研究の趣旨を了解してもらい，対話した。

事例　対話の一部

A 君：幼稚園の頃から，自分は一人遊びが多かった。遊びに誘ってくれたのにも関わらず，断ったり，最悪の場合，砂をかけたりと自ら遠ざけることが多かった。一人にしてくれということが多かった。小学校でも班遊びというものがあったが，それにも消極的で，昼休みにも人気のないところによくいた。そういう拒否反応が出てしまうことが多かった。放課後でも，同級生が家に来てくれたのだが，それも拒否し，自分から遠ざけた。要するに放っておいてくれということが多かった。一人でいたかった，早く帰りたいということしか頭になかった。

私：1，2 回生のころは，食堂で皆に背中を向けてお弁当を食べていたね。

A 君：基本，友だちはいらないんで。

（介護実習の話題から）

A 君：ずーっと話をしていたおじいさんがいて，最終日に「兄ちゃんありがとう」って言ってくれたことが印象に残ってます。

（3 回生になって，ゲームサークルに出入りするようになって）

A 君：2 年待ちました[やれやれという表情で]。趣味が合う人にやっと出会えたんで。

考察

彼は子ども時代から，自ら人を避けるという対処の仕方で，友だちとのトラブルなど自分にとって否定的な体験を回避し続けており，それを「友だちはいらない」という信念に変えて自分の尊厳を守っていたようだった。授業の中で人とやり取りすることが肯定的な体験となり，自己理解のスタート地点に立った。その後，ゲームや声優の話題を通じて同じ趣味を持つ者とつながると，大学祭，オープンキャンパスのボランティアなど，意義ある自分を感じられる活動に積極的に参加していくようになった。ここまでの人生も意味あるものとして受け止めながら，どう生きてきたかゆっくりと対話することで，自分の変化を再確認していった。ここまでの経過は順調である。が，しかし，学校はあくまでも守られた空間である。社会との接続は A 君と共に考えたいこれからの課題である。